

ヨット競技と安全

～セーリングを安全に行うため～

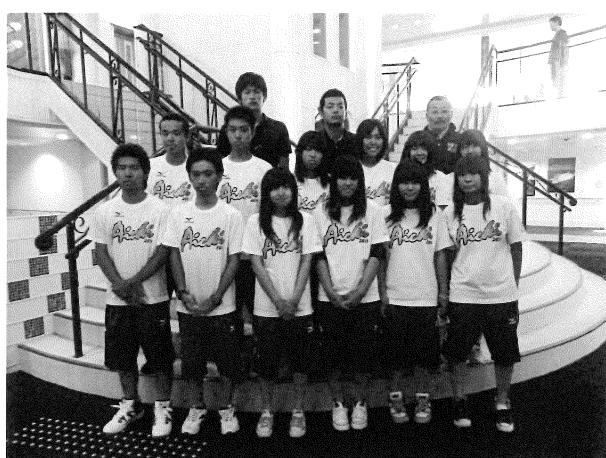
愛知県 愛知県立碧南高等学校

石川 健二

1 はじめに

愛知県立碧南高等学校は、愛知県碧南市にある今年創立 85 年を迎える伝統校である。生徒は約 7 割が碧南市、隣市の高浜市から通学しており、地元からの大きな期待を受けている。各学年 8 クラス（普通科 6・商業科 2）の計 24 クラスで構成されており、945 名の生徒が在籍している。普通科の生徒は進学、商業科の生徒は就職を目指して、日々勉学に励んでいる。

本校ヨット部は今年度創部 61 年目を迎える。毎年インターハイや国体に出場し、上位に入賞する全国でも有数の強豪校である。平成 22 年に沖縄県与那原マリーナで開催されたインターハイでは、当時 3 年生の杉浦・梶山組が、ソロ競技で悲願の全国優勝を成し遂げた。今年度は、愛知県蒲郡市海陽ヨットハーバーで行われた全日本 FJ 級選手権で男子の神谷・板迫組が 3 位入賞し、秋田県本荘マリーナで開催されたインターハイには、男子 1 艇、女子 2 艇が出場し、惜しくも入賞はならなかったが、善戦健闘した。3 年生が現役を退いた今、1, 2 年生部員は来年度の全国大会での優勝を目標に、厳しい練習を自らに課し、心身の鍛錬に努力している。



ヨットとは、「豪華な遊び船」という意味が示すように、もともとは帆に風を受け海上を疾走する娯楽用の艇である。穏やかな海面をゆったりと帆走している時は、身の危険を感じることもなく、セーリングを楽しむこともできるが、いったん天候が悪化し海が荒れだと、時には人命を落としかねない非常に危ない状況に身を晒すことになる。

また、乗艇中だけでなく、出艇・帰着時、帆装・解装中などにも、まかり間違えば大けがにつながりかねない危険な場面がいたるところに潜んでいる。

つまり、ヨット競技は準備段階から練習、レース、その後の後片付けにいたるまで、常にけがや命の危険と隣り合わせのスポーツであり、それだけに、普段からの安全対策、そして部員の安全に対する意識の向上が欠かせない。

本研究では、ヨット競技を行う際に、安全に対するどのような配慮が行われているかを、様々な角度から見ていくこととした。そして、それが更なる安全に対する意識向上への一助となればと考えている。

2 安全なセーリングのために

(1) 出艇前に行うべきこと

① 天候の確認

ア 新聞の天気図を見る。

イ テレビ、ラジオ、インターネット等の天気予報を確認する。

ウ 観望天気（雲の動きや形、風の吹き方、風景の変化、動物の動き、人間の五感の働きなどから天候を予想すること）→局地的な気象を予測する上でたいへん有効

② 服装面での安全確認—構えは、「夏でも冬支度・晴れでも雨支度」

ア ライフジャケットを着用する— 十分に浮力のあるものを、正しく着用する。
浮力があるかどうか、定期的に確認をする。



ライフジャケット

イ ウエットスーツ（水が浸入する）、ドライスーツ（水が浸入しない）を着用する。

ウ だぶだぶした服や、破れた服を着ない（部品にひっかかることがある）。

③ 艤装を確実に行う



身の安全を守るためにも艤装は確実に行わねばならない

- ア ベイラーの閉め忘れ等にも気を配る→浸水しないため。
- イ 完沈（艇が180° 横転すること）を防ぐため、浮力体をマストに付ける。



マスト上に設置された浮力体（黒球）

- ウ 艤装中もけがをしないよう細心の注意を払う（部品で手を切る、ブームパンチで顔面強打するなどはよくあること）。

③ 出艇申告を必ずする

- ア ハーバーには出艇届が置いてあるので、サインをして出艇する。もちろん帰着時には帰着申告をする（しないと大騒ぎになり、多くの人に大変な迷惑をかける）。

④ 十分な体力作り

- ア 遭難した場合、体力の有無が生還の鍵となる→シーズンオフに筋力、サーキットトレーニング等で基礎体力の増進を図る。

(2) 出艇後に心がけるべきこと

- ① 気象の変化に気を配る
- ② 艇団をつくり、単独行動は絶対に避ける
- ③ レスキュー艇を艇団近くに待機させる（無線・携帯電話等、通信連絡手段の確保）
- ④ マナーを守る

- ア 海岸や海を汚さない。
- イ 操業中の漁船、漁網や延縄に近づかない。
- ウ 航行中の本船には近づかない。
- ⑤ ルールを守る
 - ア ヨットが互いに接近し、衝突の恐れがある場合は、ポートタック（風を左舷から受けている状態）の艇はスターボードタック（風を右舷から受けている状態）の艇を避けなければならぬ。
 - イ 二隻のヨットが同一タックの場合、風上艇は風下艇を避けなければならぬ。
 - ウ 追い越していく艇は、追い越される艇の進路を妨げてはならない。
 - エ 動力船はヨットの進路を避けなければならない。ただし、その行動が困難となるような状況においては、ヨットは動力船の航行を妨げてはならない。

(海上衝突防止法より)

⑥ その他

- ア 熱中症を避けるために、こまめに水分補給を行う。

3 乗艇中の危険な事例およびその対処

出艇前の準備や出艇後の安全に対する配慮を完璧に行つたつもりでも、予期せぬ事態に遭遇し、危険な状況に陥ることはある。むしろヨットとはそのようなスポーツであると考え、危険な状況に直面した場合の対処の仕方も身につけていかなければならないだろう。

以下に、部員が実際に陥った危険な状況と、その時どのように対処したかを事例として列挙し、若干の考察を加えていきたい。

一事例一

- (1) どのような操作をしていいか分からなくなり、パニックに陥り過呼吸になった。
- (2) 沈起こしをしようとしたが、勢い余って反対側に横転してしまった。その際、ブームパンチを頭に浴び、一瞬意識が飛んだ。
- (3) ライフジャケットの浮力がなく、沈した際に沈んでしまい溺れそうになった。
- (4) 艇内のロープの整頓ができておらず、足に絡まり身動きが取れなくなった。
- (5) 完沈した時、コックピット内に閉じ込められ溺れそうになった。

一対処一

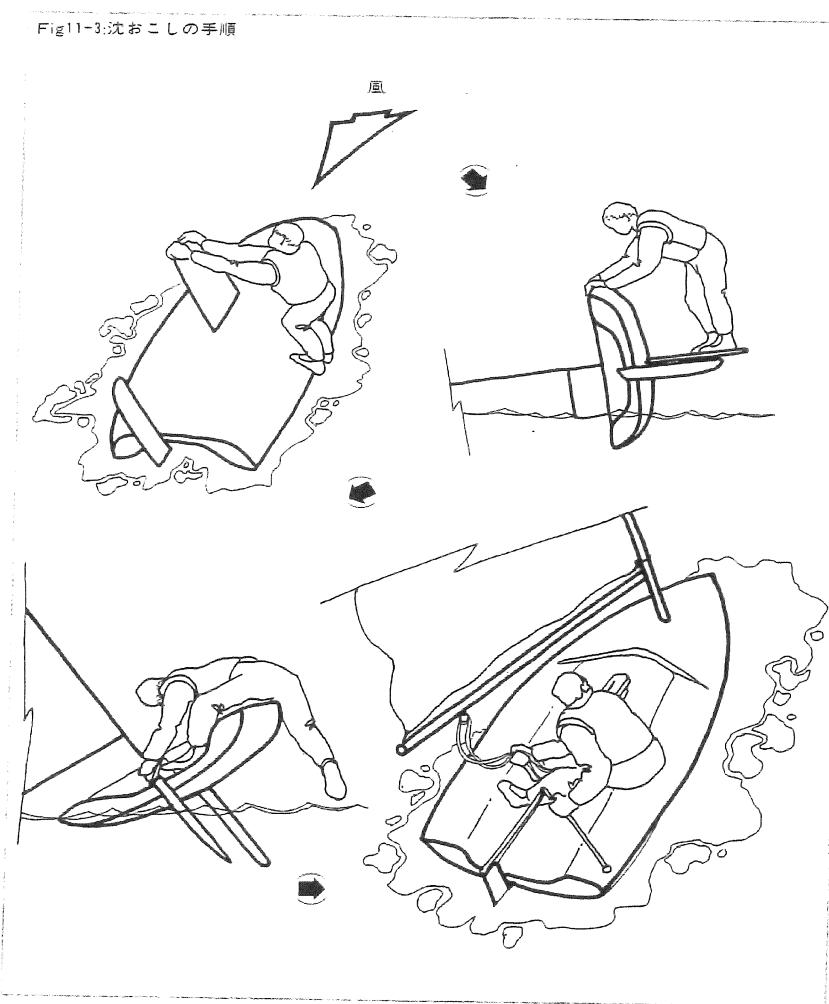
- (1) 対しては、
岸壁寄りだったので、救命処置ができる人が海中に飛び込み救助した。
- (2), (3), (4), (5) 対しては、
パートナーが冷静な判断をして対処した。その際、お互い声を掛け合いながら行動した。⑤の事例においては、完沈した艇のコックピットに空気が残留しており、パートナーの一聲でその空気を吸い、海中に潜つて艇外に脱出することができた。声を掛け合う事で冷静を取り戻すことができ、パニック状態から脱することができる。

—考察—

事例（3）、（4）は、日頃の整備を怠らず、整理整頓を心がけていれば、防ぐことのできる事例であろう。「靴をそろえて置きなさい。」「部品や工具はもとあった場所にもと通り返しておきなさい。」など、日ごろから身の回りの整理整頓をしっかりと行うよう口を酸っぱくして指導するのはそのためである。

事例（1）、（5）については、まず冷静になることが必要だ。経験を重ねることで冷静な判断を下せることが多くなるであろうが、もっと大切なのはパートナーと声を掛け合うことである。そのために、練習、大会等で常に大きな声を出すよう指導も行っている。

事例（2）の沈であるが、ヨットに乗る以上避けられず、わざと沈させて沈起こしの練習をすることもある。以下の図は沈起こしの基本的なテクニックである。



「新版ヨット百科」(舵社) より

事例（2）のような状況に陥らないためにも、沈起こしの手順は1年生の早い段階でしっかりとマスターしておく必要がある。

4 新入生に対する指導

本校ヨット部に毎年入部してくる1年生はほぼすべてがヨット初心者である。何から何まで一から教え込まねばならないのであるが、特に安全面に関する指導は、自分の命に関わることだけに徹底的に行う必要がある。

O B・O Gや2, 3年生が、自らが遭遇した危険な状況やどう対処したかについての話はもちろんのこと、練習中もいかに安全な状態に身を置くか、たとえば、「なるべく風上で練習する」、「岸壁に近寄らないようにする」などといったことも教え込んでいく。

入部したての1年生は危険の少ない海面で、まずはセーリングを楽しむことから始める。しかし、しばらくすれば上級生と同じ海面で同じ練習メニューを消化するのである。ヨット競技の危険性に対する意識を薄弱化させないためにも、同時並行で安全指導を徹底して行っていかねばならない。

5 まとめ

ヨット競技に取り組む際、最優先されなければならないのは、命を守るということである。海上に出て危険な状況に陥った時、周囲が必ず助けてくれるという保障は全くない。自分の身は自分で守る、つまり自己責任はヨットの鉄則だ。

今回、この報告をまとめるうえで痛切に感じたことは、ヨット競技は日常生活を土台として成り立っているということである。「3乗艇中の危険な事例およびその対処」でも取り上げたが、普段の生活で整理整頓を心がけいれば、艇内でシート（ロープ）が足に絡まり危ない目にあう、ことはないはずだ。日常生活がヨットの技術向上や安全に対する意識の向上に直結するのは間違いないであろう。

これから今まで以上に、ヨットと日常生活の関連性を部員に訴えかけ、“ヨット競技と安全”ということに目を向けさせるよう指導していきたい。

(参考文献及び資料)

- ・『新版ヨット百科』(舵社)
- ・『ディンギー』(同胞社出版)
- ・『スポーツシリーズ～ヨット〈初級技術編〉～』(成美堂出版)
- ・『ヨット、モーターボート用語辞典』(舵社)
- ・『滋賀医科大学体育会ヨット部安全対策マニュアル』(滋賀医科大学体育会ヨット部)
- ・『部活動における事故防止のガイドライン』(神奈川県教育委員会等)
- ・『ヨットを楽しく安全に乗るために～競技の特異性を克服して～』

(愛知県高等学校体育連盟ヨット部会 宮崎庄悟)

(協力)

- ・碧南セーリングクラブ